

| | |
|--------------|---|
| Title | <書評>Maria Nichterlein and John R. Morss, "Deleuze and Psychology : Philosophical Provocations to Psychological Practices" |
| Author(s) | 木元, 竜太 |
| Citation | 共生学ジャーナル. 2017, 1, p. 99-104 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/67025 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

書評

Maria Nichterlein and John R. Morss

Deleuze and Psychology: Philosophical Provocations to Psychological Practices

Routledge, 2016, 174 頁

木元 竜太*

Ryūta KIMOTO

1. はじめに

“*Deleuze and Psychology: Philosophical provocations to psychological practices*” は、豪州メルボルンの Austin CAMHS (The Child and Adolescent Mental Health Service) で臨床心理士として働く傍ら、臨床家として私的にも活動している Maria Nichterlein と、同じくメルボルンのディーキン大学のロースクールなどで上級講師として勤務している John R. Morss によって執筆されたものである。

本書の中で著者が想定する心理学とは、主に臨床心理学のことである。また、本書の主眼は、臨床心理学の実践者や治療者はもちろん、臨床心理学専攻または大陸哲学に関心のある学生や研究者も対象にし、20 世紀の現代思想の旗振り役であるフランスの哲学者ジル・ドゥルーズ (Gilles Deleuze) の思想を、初学者にも理解しやすいように紹介するとともに、彼の哲学を臨床の場で実践する道筋を模索することである。

ドゥルーズの著作において精神分析はしばしば取り上げられるが、ドゥルーズが心理学に直接言及することは稀である。これには、精神分析が精神医学界においてその中心的存在であるフランスのお国柄がおおいに影響していると考えられる。しかし、我々の生に深く関わってくる心理学が、ドゥルーズ的な視点からさほど考察されてこなかった状況に鑑みて、本書の試みはドゥルーズ研究の中でもとりわけ異彩を放っている。

* 大阪大学大学院人間科学研究科共生学系 (u888768a@osaka-u.ecs.ac.jp)

2. 本書の概要

1章の *A walk in the park* では、ドゥルーズの思想的源流である、スピノザ、ニーチェ、ベルクソン、ヒュームをたどり、ドゥルーズが彼らの思想をいかにして自身の「差異の哲学」の中に取り込んだかをまとめている。

2章の *A question of failed identity: psychology's unit of analysis* では、現代の心理士業界の抱える問題点を列挙し、その問題を乗り越えるためにドゥルーズの「アレンジメント (agencement)」や「群れ」という概念を導入する(これらの概念は後で詳細に述べる)。

3章の *Empirical becomings: the problematic position of psychology's method* では、心理学(精神分析学)の家族主義的な方法論やその倫理的側面、人間の生を標準化する側面を批判する。心理学はドゥルーズの「生成変化」や「メジャー科学」としての心理学の考察を取り入れることで、そこから脱却できると著者は主張する。

4章の *The actuality of multitudes* では、心理学的治療がその生成変化や群れをどのように捉え損ねているかを仔細に論じ、5章の *A practical approach: Deleuze and the clinic* では、事例も交え、臨床における診断の問題を考察している。

3. ドゥルーズにおける主体化のプロセス

まずは、本書で扱うドゥルーズの諸概念について整理する。心理学は、ある理想的な主体を設定し、その理想に近づくように患者を治療していかなければならない。そこで本書では、ドゥルーズ哲学における主体化のプロセスを再構成することで、歪められた主体、あるいは理想的な主体とは何かという問題について考察する。

著者ははじめに、スピノザの「内在」について言及する。「内在」は一元論的であり、それゆえデカルト的な心身二元論を拒否する。すべてのものは神秘的な外部から到来するものではなく、既存のカオスの中から発生するというのである。

さらにニーチェを参照し、人生の価値の判断をする際、その価値は道徳的

なシステムのような外的な要因によって測定されるのではなく、判断をする人の生き方に内在していると論じる。

著者によるとドゥルーズは、ベルクソンの生氣論から、物質と精神の単なる区別ではない、知性によって把握される運動と物質的運動という二つの運動を取り出す。この二つの運動の区別こそが重要だというのである。非物質的運動は潜在的なものであり、物質的運動はその潜在的なものの「現働化（actualisation）」である。この「現働化」は、ドゥルーズの「生成変化（devenir）」という概念を理解するうえで重要な手がかりとなる概念である。

最後に、ドゥルーズの主体化のプロセスを考えるうえで外せないのがヒュームの経験論である。著者によれば、ヒューム哲学において、現実であるのはプロセスであり、主体と客体の絶え間ない自己同一化である。知性は、我々が到達しうる外的な自然界の秩序由来のものではなく、ひとの経験の能動的な組織化から生じてくるものである。その経験とは、ヒュームにとっては知覚された感情としての「印象」の結果である。ドゥルーズはこの「印象」を、無作為性の中での前人称的な特異性としてのカオス、と言い換えている。

このようにして、ドゥルーズ哲学の中で、秩序はカオスの中から生まれるものであり、主体は生成変化の中で抽出されるだけの付随現象である。心理学や精神分析においては、主体を実体として見るのではなく、むしろ生成変化の方を捉えることが求められる。精神分析は、生産的な潜在性としての無意識を見出すことに成功するが、この無意識の活動は家族的な動態の中で捉えられ、解釈されてしまう。

また、ドゥルーズは、『千のプラトー』の中でフロイトの〈狼男〉の症例を引き合いに出し⁽⁴⁾、患者が狼になるという生成変化のプロセスの中で捉え、狼が「群れ」で行動していることに注目すべきであると強く主張する。つまり、狼を一匹で捉えるのではなく、ある一匹と群れ全体との関係性の中で、狼を捉えるべきであるということだ。これは、前述の「アレンジメント（agencement）」と近似するものである。

狼だけでなく、人間の活動もまた個人として独立したかたちで把握されるべきではない。あらゆる言表が社会との関係性の中で成り立っているように、心理学や精神分析の場における患者も、その患者の生や置かれている状況を、国家や社会との関係によって捉えられるべきである。

4. メジャー科学としての心理学

アレンジメントでは、国家や社会との関係から個人の言表やその生のあり方を見ることの重要性が語られるが、その関係を成立させ、条件を規定するものこそが、「メジャー科学」としての心理学であるのだ。

心理学の一部は、『千のプラトール』の中で提示された概念である「メジャー科学」に分類されると著者は断定する。心理学は、近現代における（労働生産の）人口管理のための施策の中で重要なポジションを占めている。少なくとも過去 100 年に渡って心理学は（主に、心理検査という形態をとり）、移民と徴兵の際の人びとの選別、学校教育の場における子どもの能力に応じた選別、社会福祉と労働人口の管理という二つの奇妙な混淆の中での、精神医学に対する資源として用いられてきた。つまり、メジャー科学とは、国家的な政策と蜜月の関係にある。国家の利益追求のために用いられ、統治する者とされる者、インテリ層と労働者層の明確な区別の上に成立する。

一方でドゥルーズはこのメジャー科学に、マイナー科学を対置させる。マイナー科学は人びとの間の多様性や差異を育み、肯定するものである。メジャー科学としての心理学は、「健康的な人間である」という基準によって人びとを選別し、標準化を進める。マイナー科学はその標準化から逃れ、集団の中の人びとの多様性を保つ。

精神医学の臨床現場は治療の場であると同時に、その意味において、メジャー科学としての心理学とマイナー科学としての心理学のせめぎ合いの場である。精神医学の臨床現場では、心理士は精神科医に対して従属的な立場にあり、主人としての精神科医に対して、家の中での執事のような役割を担っている。そのヒエラルキーの中で心理士は、まさにサービスを施すプロであることが求められている。それを求めているのは国家であり、心理士は、多様な人びとの管理をするという点において国家にサービスを供給するのである。マイナー科学としての心理学は、心理士がその役割を担っていることの是非を問うことで、それに揺さぶりをかけるものである。

同時にそこで問題となってくるのは、患者が、そして国家、社会が、病気の診断名を求めることである。精神医学関係者が診断をする際その拠りどころとするのが、アメリカ精神医学会が作成した DSM-5 である。

たとえば個人が社会の中でどこまで法律的な責任を負っているのかを判断する場合、DSM-5 に従って診断され、精神の障害の重さが測られることになる。これはまさに心理学のメジャー科学としての側面である。DSM-5 に沿った診断が、行政からの要請によって運用されることになる。

患者には診断体系の中に分類されることを欲するという一面がある。他方で、その体系は、標準化によって人びとの生成変化の動きを抑制するという面もあり、極めて保守的なものである。このようにして、ドゥルーズ哲学の観点では、診断名をつけることは、生成変化を見落とすという点で避けられるべきである。

では、診断に頼るのではなく、どのようなかたちで患者を治癒へ導いていく必要があるのか。その手がかりは、ドゥルーズの「症候学 (symptomatologie)」にあると著者は考えている。「症候学」は、人生の中にちりばめられた、所与の様々な可能性の記号を、臨床現場だけに限定せず、読み取ることである。これは、投薬治療の外部に位置付けられる。本書 157 頁で言及されているように、この「症候学」こそが、近年日本でも注目を集めているオープンダイアログ⁽²⁾を理解するうえでその核心となるものである。

5. おわりに

ここまで、ドゥルーズの思想の軌跡とそこでの心理学の位置づけを、主体化のプロセスとメジャー科学としての心理学という側面から見てきた。本書はまず、心理学において理想とされている人格・主体とは何であるのかを、デカルトの心身二元論まで遡り、西洋哲学史の流れの中で明らかにした。それに対置させるように、ドゥルーズの主体化のプロセスを描き、伝統的な心理学に揺さぶりをかけることを試みた。

そのような理論的な側面が鮮やかに描き出される一方で、本書では、ドゥルーズ的な心理学の具体的な方法があまり検討されることがない。ただ、その部分だけをもって本書の価値を判断するのは早計である。むしろ本書は、近年高まりつつある、精神科の治療並びに心理学的実践の改革の機運の中で、ドゥルーズの思想を用いるという壮大な実験の序章として位置づけら

れるものである。著者の今後の具体的な実践と研究に期待したい。

注

- (1) 『千のプラトール』の第2章を参照。フロイトが診察した〈狼男〉の症例のこと。〈狼男〉と名付けられた、ロシア貴族である患者の男は、六匹か七匹の狼の群れの夢を見ている。フロイトはその夢の原因を、幼少期の体験に由来する恐怖に求めた。
- (2) 斎藤（2015:32）によれば、オープンダイアログにおける（統合失調症だけでなく、多様な精神疾患の）治療の場では、参加メンバーの身分や社会的役割（医師と心理士、看護師といった医療従事者としての役割、患者、患者の家族）が区別されない。診断を下すというよりは、連日のように対話を重ねることで、患者の不確実な状況を乗り越えていくという手法が選択される。

参考文献

- 斎藤環 2015 『オープンダイアログ』 医学書院。
Deleuze, G. et Guattari, F. 1980. *Mille Plateaux*. Paris: Minuit.